猿蓑

乾

へ5
4430
1

へ5
4430
へ5 特 1-2
4430
1

昭和九年
九月二一日
購求

青真人南序

能諧乃集つくる事古今ゆ
たりくは道はおこりて起
き時なり純やの術の事一ぬ
してそれ白ゆ魂を入さま
くゆえよ極めこうして似る
面しく世まくまり
もくんようして不愛其愛

を高くむ立德ハいまに及ん
ばんをこそ法華経なり
こたり彼石の上人の骨を
てんを作りて禪の法
為る留を聖やにたん結
ゝ法純なる人を成て法華
ゆゝを五の禪の法純さ風は
反魂乃法ゝゝこうゝ結ふ

反魂をしたまひ入ゝ
ゝアイウエオよくひきく
いうれん聆禪を為め西
し只俳諧ゝ魂に入ゝ純
ゝゝて我翁行脚乃ゝ
伊賀越しゝ山中ゝく
猿ゝ小蓑ゝを着て俳諧
乃神を入ゝ今純ゝた

たまたま新勝の句を吟じ
ひ者和あるして懼るべき句
術なりこれを元らして此
集をつくりて猿蓑の名
付申侍者也序を
吐んとすれば魂を合せて素
元兆乃はじめなるよまうせて
書

猿蓑集巻之一

冬

初しぐれ猿も小蓑をほしげなり　芭蕉

あら海や佐渡に横たふ天の川　其角

時雨るやあらひるるまの鳥の声　千那

幾人かしぐれ過ぬく駅の灯　僧丈艸

馬方の提灯ゆるしぐるる哉　猪苗所正秀

庚申や小雨降る沼の蛙　史邦

舟人よあつまりて酒のむ　尚白

伊賀の境より

なつかしや奈良の隣の一時雨　曾良

時雨るゝや黒木つむ屋の窓のうち　元水

大津

ちりて竹間の月やもりしる　乙刃

角すまして月の出ぬ小夜の秋　羽紅

新田より稗殻焼るしるの煙　膳所　昌房

いなづまや海の中なる帆片帆　去来

ふる郷よりはや北国の月のあし　伊賀　百歳

一ふしの動く地なり郭公　野水

続いて

ふるまひて坊とむかふる船の中　其角

帰りの船うたんの延切し　同

禅寺の雲の高殿や神無月　元水

石垣やわれ松よ十月　嵐蘭

こがらしや頬腫病む人の影　芭蕉

[illegible]　　元兆

なるよ[illegible]

撰集のうちの那らに桂[illegible]れ　伊賀　土芳

遊婦をなりあて通るす[illegible]　膳所　裾道

ちのうれしさ[illegible]人[illegible]女　越人

[illegible]　伊賀　猿雖

古ちさ[illegible]貴子も[illegible]　元兆

翁の[illegible]

雜水のかゝるこゝ[illegible]　其角

こゝ[illegible]牡丹のうれしき裸　伊賀　東葉

草津

[illegible]　尚白

神道水にうつる清[illegible]　珎碩

霜月朔日

[illegible]ら[illegible]物[illegible]　赤梢

水[illegible]月[illegible]　伊賀　良品

　　羽前坂田　不王

今ハ世をなのむしかすやみの蝶　尾張　旦藁

屋敷のこうもりさまよふ蝙蝠　玄棗

一、夜くさむきに湯や新茶茶

きらきらにタ賀はなの井の雪　伊賀　探丸

茶湯とてつらつらもなしに　江戸　尚白

炭竈よりも煙の倒まくら　亀翁

住つかぬ蝶のうろや夷火燵　丸兆

寢ころやや火燵蒲團のまくら　芭蕉

門前に小家あつめ蚊遣火　其角

ほ鬼やはらひ切る屋敷　尾張　荻境

ちらつくハ眠るやなぎのうち　伊賀　半殘

貧交

まいらせ張子切を讓り受　文州

浦風や巴をとりすもう　曾良

あつ儀やうるる刎る交衡　去來

猥のあと蹈清やや濱千鳥　史邦

背門に乃入江のほるあをられ　文州

いかづちの雪とよまして鳴千鳥　千那

矢田の野や浦のあつれる鳴あを　允白

花さけ乃入へる跡や鷺の羽　本節

ゆく春をうんで真の小鴨哉　文州

ちらしも寒入るみち余吾の海　路通

配まて採ぬるん鷹はうか　旦藁

襟まで引入る冬ゝ月　枳風

元禄戸や頭のうれて冬ゝ月　其角

かゝらせ蒲団ちらやみの蹤　長崎　莫年

乃入やるまゝ猿人ゝし　石部山　大津尼　智月

翁の御ふるまひ食をあと

ら記あり略す

首ちゝてうつ雪ちんやけ食　義濃　竹戸

題竹戸之食

乃ちゝ我ゝまはれあゝて紙食　曾良

魚のうけ粉乃やるせかき狩　探丸

志川の上に数珠も珍す細工書　文坪

虎白殿より候す

藤つるの外にこもり居る霞哉　史邦

梭鶏の羽ぶく霧の狂ふあり外　野童

鶺鴒の鳴くこゑすす霧うれ　伊賀　不蜂

呼人も朝寝ぶるあれ外　凡兆

ちるれ滝ふるさとや朝飯の出る迄　膳所　畫好

ふつ雪や問ふ居ぶれ人の雅　其角

初雪よ鶯郭公の上に軒朝　史邦

雪やけの日の照ふくや雪の明　羽紀

わつらふ人の爪の長き春の暮　探丸

下京や雪つもしよ夜の面　凡兆

ちるくと川一筋や雪の原　同

信濃路をとるとりて

雪ちらや穂屋の薄の刈残　芭蕉

草庵の留守をしるく

養老ハ笠屋もあけぬ養老の　其角

雪代目ハ竹の子笠ぬはるる　尾張　羽笠

涼しさ健ヤ小雨降ぬ　長崎　卯七

ひいらげて物やの雨を吸のてまこと　去来

青垂追悼

乳のみ子に世を渡る師走　尚白

うゝ魅も元也の慶を吉代内　芭蕉

鉢ゝ紀蟻ハ影ゝ仏あをゝ　乙刀

一月ハ三ゝ来ゝ日ゝゝゝゝ　文州

住吉奉納

夜神ゝ和や鼻白ゝ雨の内　其角

節季候ゝ人のゝむ〳〵ゝ事　伊賀　須琢

あゝやゝちいやゝまゝゝ　同　祐甫

乙刀

新ゝ宅ゝて

人ゝ家をゝゝ世ゝゝ辛忘　芭蕉

弱法師ゝ門ゝ世餅の礼　其角

歳の夜や胥視交を掌けぶる桃　長和
うす壁代一文字ハ行ふらしの雪　去来
ふきて吹く年越ぶきけ伊勢うめ　同
大とりや夜明を待る人ごゝろ　羽紅
やらんぶ〳〵又やらしん嚴の雪　其角
い孫つゞくよいらつ年ぶ暮　路通
年の夜ぶ破ぶ袴ぶ幾ぶ重ぶ　牧風

猿蓑集巻之三

夏

有明の面ぶすぶにぶまぶ　其角
夏ぶ来ぶ時ぶ鳥　夏節
郭ぶ積ぶ雲ぶ峰ぶ　芭蕉
時ぶ雨ぶ降ぶて涼ぶ　尚白
門ぶ行ぶ人ぶ　允兆
ひる迄ぶ蚊ぶ帳ぶ　智月

蜀魂なくや五月の雨の角櫓　史邦

入れぬしらまの中やほとゝぎす　羽紅

ほゝとの泥濘ふかわかるゝ　文艸

ふたすき代官屋やほとゝぎす　去来

こひ死も我塚ぬけよ五月雨　遊女　奥刀

松島一見の時あまもうらやゝ
雨の色こそあわれなれ

雲鴻や雨を呼ぶほとゝぎす　曾良

ほとゝぎすはつかせよかんこゑ　芭蕉

旅館庭ヒロクシテ草ヲウヘス

月明草を一ちら　膳所　曲水

四月八日詣慈母墓

ちゝはゝの墓うるはしく蓮の花　其角

蓮うゑぬ墓を樒に濯ぎ　江戸　全峯

別僧

ちるうめの花やゝとゝ来襄花（ケシノハナ）　越人

なつもまの雨ふる人をまつの雨　珎碩

箱に伏られてすまあらそ
もりて　　亡人 杜國

似合しまけしの一文字の墨

きてふさき匂ひゆゝしけしの玉　嵐蘭

井のすゐすゐしく清し　杜國　　李殘

起出くゆゝしきもれる
鶏の間乃

起くのむうらをかまつうら　仙化

題去来之蹉跎落柿舎有

屋根ら烟も木魚の音の長閑　元圃

破垣やわつゝ麻子ぬかしの道　曽良

南都旅店

詞のうくいたく乃閨北枕　千那

洗濯やきものゝ迫伝の玉　尾張 薄芝

豊國にて

竹のよ代力を経て色ふへき　元圃

色けの子や富蔵ア一面ゝう　去来

たけのこや雅ぶの猪ぬかし　芭蕉

猪を吹うへさとうてもらふ　正秀

明石夜泊

蜻蛉やとくるもさすがあきの日　芭蕉

見つけしや鵜屋祭を鍋一つ　越人

五月三日

あるまつて夏草と共に蒲の花　其角

線香ふかるるまむ顔髮　芭蕉

隈籠の底ふるふ餅粽　江戸　岩翁

ことひきて客人やとまりぬ　尚白

五月六日大坂より配の遠忌を修す

大坂や乃あぬ夏乃ゐ中　伊賀　蟬吟

奥刀ゝる鎗ゝて

夏草や兵ゝもゝ乃跡　芭蕉

這出よかひ乃下ゝ蟬の殼　同

ゆ境ゝひゝるゝいゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝ

かゝつゝゝ角ゝゝゝ法ゝ石　同

五月雨や家あり捨てあるこまの　允兆

ひ孫麦の味なき市やわりなし　末節

雨さの謂沢庵和尚ありきつつ雨　史邦

奥羽名取の郡より入て中将実方の墓ハこゝやと尋ねもとめて道より一里ばかり左り乃方笠嶋といふあるよしなれとも雨ふりあるとをゆかつてもまいてもらなくおもひもらるゝ

笠嶋やいつこ五月の道しるべ　芭蕉

大和紀伊の境ひとゝの峠を越て紀の国に出る

すゝめられて紙のくるに書つけ侍る

つくりもとゝてあり坂やあり雨　去来

製剤や一夜よ今時とゝあり雨　允兆

日の道や葵ばかりさく月あり　芭蕉

往地や若葉ばかりとゝあり雨　羽紅

七十余の老醫今もとゝあるよしなれとゝ市にいとゝ人の白髪ばかりなる醫いまとゝあり時もとゝ見えれるとゝあり人よあり

みちのくにて古郷をとゝ

[illegible]

六尺もかはらぬや五月あめ　其角

百姓も麦よ取つく茶摘哉　去来

[illegible]や茶[illegible]　正秀

つみ合子もかけや麦畑　膳所 游刀

孫と憂しして

麦畑の家にてやらん雨蛙　智月

麦畑[illegible]　江戸 花紅

[illegible]川の関こえて

風流のこころやゝ奥の田植うた　芭蕉

出羽の[illegible]にて

買帰ふ面影よして白粉の香　同

法隆寺開帳

南無佛の姿を拝す

浮袴ぬぎ捨なつく白粉の香　千那

田の畝の豆つゝ[illegible]　伊賀 万子

膳所曲水之樓にて

螢火や吹とばしたる川の上　去来

塚田乃螢ゑん二句

閨の夜や子を法華堂の螢かな　凡兆

ほうたるや船頭酔て坐りつる　芭蕉

三熊野へ詣もしらぬ蛍哉　長崎　田上尾

螢火やこゝ迄うつる八思尾谷　尚白

あれらるゝ軒と思ひあくるあれ　半残

草むしりや百合の芽の半ば

病後

ゆ[illegible]ゆかしらふるつゝ百合の芽　大坂　何処

すゝ[illegible]や新らしき百合の花　乙刀

機嫌を作りて

子やなるん其子の母を蚊の喰し　嵐蘭

餞別

五さとや蚊屋もとるぬ蔵の宵　膳所　里東

うゝ[illegible]人よりれ

糸宮する注者まられもけ

[illegible]の夜を吉沢の寂寞[illegible]　其角

[illegible]や蚤の[illegible]く[illegible]の耳乃宮　文艸

下[illegible]や地[illegible]なる[illegible]の蟬の[illegible]　嵐雪

客ふりや[illegible]の[illegible]の蟬の[illegible]　膳所探志

[illegible]の[illegible]の蟬の[illegible]　芭蕉

[illegible]や[illegible]の[illegible]　伊賀槐市

[illegible]り[illegible]の[illegible]の[illegible]流れ　元旭

[illegible]の素[illegible]唱奇[illegible]合歓の[illegible]　千那

白粟や鐘[illegible][illegible]を日[illegible]　史邦

素堂之蓮池邊

白蓮や蓮一枝の[illegible]ま　嵐蘭

日焼田や時々[illegible]鳴く蛙　乙刀

日乃暑さ鹽の海[illegible]の蠟[illegible]れ　元旭

[illegible]日も鼻つき[illegible]の穀[illegible]屋　同

日の暑やこうろく暑さ牛[illegible]　正秀

[illegible]暑[illegible]蟬[illegible]髮の[illegible]　不節

しねんこの藪ふく風のあつかりし　野童

夕がほによばれてつらき暑さ哉　羽紅

青草ハ湯入ならしや川さかれ　江戸　巴山

千子が身まかりけるをきゝて
みのゝ国より去来がもとへ
申つかはし侍ける

なき人の小袖も今や土用干　芭蕉

水無月や朝めしくはぬ夕すゞみ　嵐蘭

じだらくに寝れば涼しき夕べかな　宗次

すゞしさや朝草門に荷ひ込　凡兆

唇に墨つく児のすゞみかな　千那

月鉾や児の額の薄粧　曽良

夕ぐれや屼並びたる雲のみね　去来

しはらく
洛にありく

雲のみね今のは比叡に似た物か　大坂　之道

猿蓑集巻之三

妹

[illegible]蓮[illegible]花一ツ　不知讀人

此句東武[illegible]

素堂

かけろもあけの蟲也秋の風　杉風

芭蕉庵[illegible]何[illegible]れた妹の風　路通

人[illegible]似[illegible]猿[illegible]細[illegible]秋の色　珠碩

加賀乃金昌寺に宿す

終夜松風やまとくや寒の山　曾良

芦原や蜑の家々の寝ぬ夜を妹の風　山川

あさ雲や鰺金屏に残れる月　凡兆

しら露や物の形の定まらず　去来

大比叡やこゝ迄来ても蝉の声　野童

三尺ちらして跡を忘れけり　相の山　凡兆

文月や六日もまだの夜に似す　芭蕉

合歓の木に花咲かうとする頃　同

七夕やあまのかはらの星合ひ　伊賀小平　杜若

三日月の位まちかる相撲取　去来

朝ぼらけ霧の眠の覚めやらぬ　伊賀　風麥

霧やあさこの蔓はひ出ます　膳所　及肩

蚊の声の法華をよむ様なし　嵐蘭

夏草や兵どもの夢の跡　木槿武

うらやましき松の木陰　枚風

千那

まてしばし瀬のなる音や嫁巖雨り　史邦

うそさむや藪の田よりの朝あらし　旦藁

三川
秋風やとその葉ぶりうごきけす　子尹

迷ひ子の親のこゝろやすゝき原　羽紅

八瀬おはらに遊吟して柴うりの文書ける序に

まねきまねく枴乃先の薄かな　凡兆

つくしよりかへりけるにひみといふ山にて卯七に別て

君がてもまじる成べし花薄　去来

平田
草刈よそれが思ひの秋の露　李由

元禄二年翁に供せられてみちのくより三越路にかゝり行脚しけるにかゞの国にてわづらひ侍りて先達侍るとて

いつくにかたふれふすとも萩の原　曾良

桐の木にうづら鳴なる塀の内　芭蕉

百舌鳥なくや入日さし込女松原　凡兆

亡人
初露よりも経ぞる斗まくるしく　落梧

堅田にて

病雁の夜さむに落て旅ね哉　芭蕉

海士の屋ハ小海老にまじるいとゞ哉　同

加賀の小松と云所多田乃
神社の宝物として実盛か
菊から草乃かふと同しく
錦のきれ有遠き事な
からまのあたり憐におほえて

むざんやな甲の下のきりぎりす　芭蕉

菜畠や二葉の中の虫の声　尚白

よこをかや翠に耳て鳴夜ハ月よ　風麦

いたはりましてゝる時

葉月や矢橋に渡る人とめん　亡人　千子

三ケ月に鰍(つう)のあるゝ風のかゝり　之道

粟稗と目出度なりし娵の月よ　半残

月見せん伏見の城の捨郭　去来

翁を茅舎に宿して

おもしろう松笠もえよ薄月夜　伊賀　土芳

加茂に詣てよ涙の時雨かの人の
たゆることのやしうの神垣よ
をつるまでらしぶや

月就や拍子揃ふ勝の上　史邦

古屋の六條よかこうちつけ
こうしまうてらし

影ひしたるまつ原朝月夜　伊賀　卓袋

まつ白紙ぶやおよしの月の紙　乙刀

京筋繁昌手紙仕習　文艸

明けの相撲やうすよ月一ツ　乙北

なりしひてこうふるあの月の面　尚白

向の能ふやあの月ぶんる　昌良

元禄二年つくし紀行
月をうて氣比の明神よ
詣ぶしの古例を

有清し越ひのうしろ　かの上　芭蕉

仲秋の望猶子を送葬て

うら夜の月ひとりぶよりあを遠遠　玄来

明月やあをさ寺ぶ茶ぶ　膳所　昌房

月見ても人の袖よりうつる　羽紀

僧正のいほりの小屋ぬれぬれる　尚白

初瀬や鳴つの滝の滝落て　凡兆

一戸や衣もやうこもしく　去来

稗の穂ぬる迄しるる雨　越人

濁糟やかつまる食ず荒畠　正秀

あやまりてきてうたる鎌か　嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音ひとつ残る秋　凡兆

しつまりて物ふる人ぞ冬籠　曽良

旅枕庵のつまとや石軒端下　千里

鳩ふくや濁柿の蕎麦畠　珎碩

上りやとしるる雨の夫　凡兆

鱈釣ひもすがしく鶴つり　半残

わかの間のつゝまる雨の蜀黍　尚白

栗を切る跡まぶしかりける　其角

言上まて鶯の鳴見や雲らまれ　琢碩

うの花のかくれ稲葉秋　土芳

稲こく母よ出迎ふうれしかる　凡兆

自題落柿舎

柿ぬすむ人やたちまちあらはれし　去来

雲ゆくや梢の下れ葉　賀茂小松　塵生

朋ともし竹切山のすそ葉　凡兆

神田秀夫

きれいこうの柿ぬすむ人の敷うれしかる
神田秀夫の敷うれしかる音　牧定
柿ぬすむ人あらはれし

花すすき大石流をまつらふ　嵐雪

山鳥の巳五日弱るすすき　文州

立出るかの夕やけ　凡兆

世の中は鶯鳴の屋乃ひとつ　同

蛙奥代嵩よりそ蛙の書　荷兮

猿蓑集巻之四

春

梅咲て人の恋乃悔をあり　露沾

上鶴の山荘よりまゐらせ候しもかて

梅ゝ香や山路猟入る犬ぼうる　去来

しんゝ香や六入墨牛の角　加賀句空

庭眞

梅ゝ香や分利しる流す谷の眞　土芳

[illegible]つ蓮屋貴[illegible]ける梅の香　半殘

梅ゝ香や酒のくさひのあるはしきこ　膳所　蟬蛹

しの夫の手やけ一筋を路のたう　其角

子良館の梅よ梅ゝ見へ

庵子良子に一ゝとこと梅の香　芭蕉

痩藪や作りたるまの新の梅　千那

庚捨て白梅こしむ迄移れ　凡兆

日當ゝ梅ゝ見ゝ屠半房　膳所　支幽

暗香浮動月黄昏

入相の梅ゝなりゝ迄しりまきれ　風麦

武はよ[illegible]ゝとも[illegible]ゝ旅亭の

殘夢

寂ゝゝ窓の梅月や窗の梅　乙弱

幸来の[illegible]

[illegible]

[illegible]

よろづ[illegible]て[illegible]ける
[illegible]人[illegible]る風雅を忘[illegible]や

蕨さいて又一句ひ[illegible]ほん[illegible]梅　嵐蘭

百八の[illegible]て迷[illegible]や商のもの　其角

ひら[illegible]寝も能[illegible]初子日　去来

野畠や唐越の[illegible]けく摘る菜　史邦

[illegible]つ市や[illegible]満る家私　嵐蘭

[illegible]月西よ[illegible]ける[illegible]　如行

憶翁之容中

裾[illegible]て[illegible]ん草拔　嵐雪

つ[illegible]て踏[illegible]る和　路通

七種や跡よ[illegible]朝[illegible]す　其角

[illegible]市[illegible]し[illegible]の[illegible]根芹[illegible]　丈艸

う[illegible]ものやわ[illegible]る芹の[illegible]　其角

[illegible]ハ雪[illegible]ら[illegible]目[illegible]れ　同

[illegible]ハ[illegible]なわ　去来

鶯の[illegible]踏[illegible]す　垣[illegible]れ　伊賀　一桐

[illegible]やうの色一[illegible]のもちうかな　江戸　溪石
うゝうすやを詠ずれて　其角
[illegible]やト駄の歯よつく小田代立　伊賀　凡兆
[illegible]やを宮よ久ちをすんのうゝ　魚日
やぬの[illegible]を折うゝ八すゝ[illegible]　探丸
けゝ[illegible]ハさるの折へき折うれ　江戸　卜宅
ぬうゝにうゝへてうれす折ハ　同　遠水
ゝゝ心　植変されす折うれ　尚白

[illegible]の[illegible]れや鯉の住所　伊賀　一嘯
[illegible]けや鮎ハ[illegible]す場乃すゝ　同　木白
待[illegible]乃[illegible]ゝ自　揚水

同[illegible]て

[illegible]めうにやゝ[illegible]の橋の事　芭蕉
うゝやまゝ[illegible]ゝ切時橋の忘　越人
うゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　去来

[illegible]路法公ゝて餘寒の當座

春ゆるやまもとうめぬ羽織哉　龜翁

おなのあぶらうりはつをを三百部　尚白

出らうや梅よあるられるこゝろ　龜翁

出る梅や幼こゝろよ物あらそひ　嵐雪

醤紫のかゝれるもあるかすれ　凡兆

白魚や海苔八下新のうい合せ　其角

人のまよこゝろまつ橋酒屋　尾張　杉峯

まるるよたゝまぬ野しもつゝ　元志

陽炎や取つゝうめる立ちけん上　荷兮

明け渡やおもこれぬあるる　百歳

うけうしやほうゝ花る岸の松　土芳

いとゆなのゝとあるゝ盧本立　伊賀　氷固

野ゝるよゝあるゝ新水　凡兆

うけ松やおもの柴胡の糸の蔦葛　芭蕉

いとゆなよ魚引のくゝ也俗獨活　伊賀　配力

物咎の塵よゝゝ　嵐雪

彼岸まへとむさも一夜二夜の程　路通

ふるしや寺のあらて涅槃像　野水

蕉の実蚊喪ハ蕉乃かすし道　九水

立さつく今や紀の国の月　伊賀　沢雉

春雨や屋敷の小草小菊咲　嵐雪

高山を見て

高雨や山ちり出る雲雀門　猿雖

不性さを起す春の雨　芭蕉

春雨や四畳の行や思の糞　史邦

ちらちらあるや軒の荷　羽紅

泥棒や四代水の哇つるん　史邦

蛙ごろうも木蓮の行や思の糞　曰房

振舞や下座なりたる去年の雛　去来

長閑さうすれ雛の写蕉の名　伊賀　萩子

桃柳くらりあらしやきんの女子　羽紅

うれ玉坊主ちんの如　三河　烏巣

里人の晴蔭しる田螺かな　嵐雄

蜂の巣〳〵一ぱい蕣のほ　半殘

帝鳶切て白根の嶽を見る　笠間山中　桃妖

いつのたつこゝろもすもや漆　伊賀　園風

月の影やこゝろ〳〵の親すめ　珠碩

花の鹿ぬむ春のすゑや緣のさき　土芳

鶯の絶や巣なれもこゝ〳〵の衡　芭蕉

越ちら飛沫ぬけて篠のつゆのあやもとゝろ〳〵遠

ゆく山路をとゝろ〳〵

鶯や巣の樺の枯枝より見ゆ　乙州

みすゝちうえんとする市のゝ　伊賀　石口

子やゆん餞りをの言あり　牧風

ひらゝ〳〵中世物語や紙あり　芭蕉

芭蕉庵のふるきを訪

童草小鍋作るあやられ　曲水

木瓜薔薇〳〵て見るゝ程ぬ　江戸　山店

畫讃

山吹や宇治の焙炉[illegible]縛　芭蕉

白玉[illegible]よきつく[illegible]　車来

[illegible]

[illegible]

[illegible]

竿[illegible]　羽紅

蝸牛[illegible]　津國山本　坂上氏

[illegible]橋の　芭蕉

[illegible]　伊賀　利雪

東叡山[illegible]

小坊主[illegible]　其角

一枝[illegible]　高白

雛の[illegible]　凡兆

[illegible]　支州

[illegible]　史邦

[illegible]の雪　千那

葛城のぬしをうる

牡丹ちる事ゆふべの秋の顔　芭蕉

いつの国花垣の庄八うのくに
あるじ八幡の社の神主
らまさちるとこそ伝へられ
れし

一里ハうれし花卒塔婆　同

元文の墓東武谷中にあり
と歳しるしれ丸年のほの
浅ましきもぬ墓のあり猫柳
行るらしかれ　奥州ゆかりこと
つくしう此猫をたつる後
池の墓猫をうる咲られ行

まうしやう花吸ふ野の仕還の　園風

知人よあくるとまりんうれし　去来

ある僧の婚りあの乳の乳　凡兆

浪人のやうくく

冠を春の夜あれうる紀鞠　半残

暗きうる乳ゆ八ゆ　伊賀長眉

それも奥るうの乳ゆくく

大寒やうゆ奥乃あの果　曽良

道灌山のほとり

[illegible]　嵐蘭

源氏の物語をよんで

[illegible]　羽紅

庚午の歳家を焼て

[illegible]　加賀　北枝

[illegible]　江戸　凡兆

海棠[illegible]月　普船

大和路の時雨

草刈[illegible]　芭蕉

山[illegible]躑躅[illegible]　探丸

[illegible]日[illegible]　智月

[illegible]　伊賀　山川

[illegible]　伊賀　式之

木曽塚

真[illegible]石[illegible]　乙刀

春雨降るまゝに初瀬の堂籠　曾良

望湖水惜春

行春や鳥啼き魚の目は涙　芭蕉